

童蒙卷之二 草

二編

五

大尾

新 雜

歐冊

五

雜
九

學校

縣中

滋賀

1595
509
Vol 5



草卷の五

第二十七章大量なる事

人或心の狭き者りう些細の事おも人の不調法を見出さ
んとしそつろちかまの失權をもこきを見て咎めんとし世
間の人と同じ職業をまきバ同職の人を羨む具繁昌をるを
嫉む一度人小等しりたるふとつるも永き月日を経まバ
怒りてき苦なる小深くこき浅心の底小舎で時をば其意
趣を返さんとるふど如何小も賤しむてく又惡むべき舉

福澤諭吉 譯

動あり心廣き人の舉動ハ全くこも不異あり他人の失禮を
 るを見てこも汝心小留りき或ハ怒ることあるも忽ちこも
 を忘れて康ふく我身ハ不幸あるも他人の繁昌を見れば
 こも汝悦び事を為さず當てハ他人と争ひ競えざるハ非
 ずまとも其争ふや自かハ賤一かをよく人の心を推察し
 て一々其舉動を咎めを或ハ粗忽小して罪を犯し我身小害
 と及ばざること甚だしき者ありと雖ども其罪を赦して問こ
 と何等の事故あるも權謀術數ふと賤しき策畧を以て自分
 の趣意を達せんと思ふことなく人の身ハ賤しくもその
 心正しけしハこも汝辱しむることなく假令ハ人を叱るも

人主惡むことふしこも汝一ハ云へハ其氣を常不安らう
 小して他人の身を害し他人の物を奪ふふとの心ハ促して
 も起らざるものありこも汝大量の徳義といふ實ふ世ハ稀
 あり徳義ふてこも汝貴まざり者ハふし

① 予せとあやの君ひをらぶはしき評判を受し事

或人予せとあやの君ひをらぶはしき評判を受し事
 學者共様々の言を流して君の評判を以てくも者少ふり
 らまといひあまを寛仁大量のひとつみはしき顔色をら為
 まをて云く其評判の虚言ハ真言あるハ余ガ行状の良
 否不由て分るることなり其流言を咎るよりも余ガ身を慎む

又或は一人の家来君を誘てたり小由りこも成遣放し給ふべしと勸る者有りし君の云く先づ急ぐ事なきを或は我より彼の者を促して斯る粗言を吐りしやも知と云て色々詮索せし小案の如く此家来ハ嘗て君のたれ小功を成して褒美を得たりし者ありけしハ君ハ大に後悔し彼の罪ありしを余が罪ありして即刻こも小褒美を賜はせたりとせ

（ろ）うおちをむと六どもひんの事

紀元千六百年の時代英吉利の内乱ありて其國王なる第二

世ぜんむを遣出し第三世うぬるむ代て國王の位小即きけしハ國中ハ觸を出して先の王と音信を通むる者ハ大逆の罪たりし者ハ布告たりききども國の貴族等ハ私小ぜんむを文通多とる者多く其中ふもごちハんとつへる貴族ハ兼て正しき人物ありしハ一筋小ぜんむもの方へ左祖し度々密書の往復も有りて國王うぬるむの聞小達しけしハ或日うぬるむとの人を内談の坐鋪へ召し探得たりし密書を出してこも示し國の大法を犯しハ宜しからざることふも先君を慕ふの義氣ハ應る小余りし領くハ汝が如き人物を以て余が朋友と為しなき

ものありて其密書を眼の前みて焼棄この度の事を心
頭お拭けざりの證據を示しけしは流石のごとくひんも王
の大量の心を奪つて以前の操を改めてことお従ひ腹心の
家来とありしは

はまむうぬらせらへの事

まむうぬらせらへハ佛蘭西小稀なる美人あり又この時
ふへそりうとて名高き醫師わけて彼の美人小親しき相互
又戀慕ももとも双方の身分不釣合ふるため夫婦の交束
も出来ざしく醫師も自かたとき思切らんとし婦人の
家小近づらざること数年ありしは或時婦人病小罹りて格

別の容体おのりてまねを刺絡るべき病症もち急彼の医
師を招待してとき候頼となり醫師ハ又探ふて婦人小逢
ひ魂も空お飛ぶもておて狼狽の余り小脈の筋を取違へ
動脈を刺したりけしは出血の甚だしきハ勿論命危き十
どある小婦人ハ更お驚く色もつらむ三日を経てハよくむ
つりしき容体とあり腕を切落されハ養生も叶ひ難き場
合お至りたまきとも醫師小對して不足ある顔色をも頭ささ
を尚も其療治を求めけりしは病症ハちよく進み最早一昼
一夜の間小命も終らべき難症小陥り醫師の心苦しきハ壁
へん言ふく胸を割き腸を断つる思を為し心配しけしハ病

人も醫師の顔色を見てても助力がたき路もつらきと悟
 て家内の者へ遺言し終りて傍の人を拂ひ醫師を枕下小呼
 べども不告げせ云く最早この世の暇をふまは祭も赤心の
 中を告げざりてわが君ハ斯る誤を為せしと余ども祭も
 於て露をうりもこき涙恨と思もぞ假令ひ今この世を去る
 も未米ハ更小く此世界小行くべきことふまは祭が身小取
 りてハ却て幸福あり唯残念あるハ世間の人の君を見るこ
 と祭が君を思ふが如くあふをりて成ハこの度の一糸小由
 て君が家業の名を落もこともつらんと思残もことハ唯
 この一事の故小祭ハ成るたけ君の心配を少ふくせんが

ため小遺言の中小も其次弟を記せしとありこの世の縁
 もこき限を随分定め小暮し給へて死生の別を告げたり
 あり
 婦人の死後小至り其遺言の書面を改めしハ大造ふる遺物
 を此醫師へ遺し興ふるとり次第を記せりをもくこの婦人
 の死したるハ全く醫師の所為ふまも其實ハ罪何る小非
 を其罪ふま須知りて斯く取扱ひしハ婦人の大量美德とい
 ふべきあり

◎若き画工三人の事

伊太里小名高き画を學ぶ學校つりて稽古をる者甚ど多し

事不出来て先生方も皆こき小驚きこの様子ふて追々執行
と遠げふは行末ハ必を銘人ふもあふべしすてこき或譽め
ざる者ハあり

然るかこの學校ふ二人の繪古人りて一人をぶろぬちと
いひ一人をろきんといひ二人ともがいとつとの友達ふ
りし夕この度の画のことお付き兩人の思ふ所大ふ異あり
ぶろぬちハがいとつとよりも少し先輩ふて画も相應ふ出
来る者ありし夕彼のがいとつとの画を見て大ふ力を落し
こきすて画のためふハ自分も評判を取しことあきども

朋輩の内ハ一段たちつたさし者りてハ己が譽もまふち
ことあふんと賤しき心を抱きて只管がいとつとと悪く何
とつて彼を評判をとりせんものと思ひゆきども彼
の画ハ實ふりた出来ふて既ハ諸先生も譽めしことあきども
今更こも成不出來ありとして誇るべき由もゆきを乃ちゆし
き工夫を運らし何とよく言を流して彼のがいとつとの画
ハ自分一人ふてかきしものふゆきを或ハ先生の加勢ふ由
て一時の評判を取しことあきども其實ハ僥倖ありと云
觸らしけり
あきふ引替へち走んたハゆきさ年若き書生あきどもが心

とつとが画の巧みを見分け心の中より感服してこそは
稱美もさること限らば諸方おて彼の画の評判高けとこそ
を聞く小柄でも何卒斯る画工おありたきりの思ひ類お
出精して怠ることお一同よりがいつとつとのいお出んとハ
敢て望む野おりさざれども唯願くば同様の者おあさんと
て一筋おこの人を目當おして己が藝を研きがいつとの
ことを口おさく云へばいつもこまを譽れざることあく彼
のぶろわちかケ色々と言を構つてがいつとつとを誇るを聞き
常おこまを堪へ難く思へり
右の如くろき人をハ一心一向お画の藝を研き毎日稽古の

場所へ通ふよも人より前お行き人より後お歸り家お歸り
ても徒お時を費さを唯稽古おの身委ねけとともいま
だ其藝を以て自か満足せど幾度とよく試みてハ又試
或ハ躬か多自か分の画を見てさてく及まざることり此画
を以てがいつとつとの筆お較べふ其及まざること幾段お
るべきやふどく歎息せしむることあり一ヶ月日を重ぬ
るお徒お次第お上達して自かおもいさし満足し世間
人も其画を譽る者少かりを乃ち又躬か力を附て云く
余も人ありがいつとつとも人あり何を必をしもこま不及お
べうとざるの理もあらざると

がいどつこいさきく上達して今ハ學校の中ふても其右ふ
 出る者ふくぶるねるも一時ハこきと覺ひーつども迎も及
 ぬこころほきしり唯がいどつこの画を見きバ安ふこき
 を誇るけりき評のこして自か其藝の拙き代覆さんとの
 ーけかふろきんぞハ絶て議論を好むを人の知らざる愚
 みて獨て其藝を研き自分のかきー画をバがいどつこの画
 の傍へ持来りーこともな
 二の學校の仕来ふて一年ハ一度稀古人の画を坐鋪へ掛け
 諸先生の鑑定ふて其甲乙を取極り最上の者へ褒美を與ふ
 ことありこき代画の展覧といふがいどつことも此度の展

覽へ持出さんとて力を盡して一枚の画をかき當日の前晚
 不至で漸く成就して其仕揚ふ色をよくとるため脂を引き
 其より彼の坐鋪へ掛けて明朝の展覧へ供へたり然る小
 ろぬるハがいどつこ去てー跡ふて竊ふ坐鋪へ入て其画
 小何ら腐蝕薬とありかきて散々小こき代残ひーこき惡む
 べき所業ふれ

ろきんをも同トく力を盡して画を作て其心願ハ唯がいど
 つこの画よりもうなり下ふ落ちざるやうおと思ふつと
 叔その夜も明て當日の朝ふ至り廣く明々大廣間へ諸先
 生も追々入来て拭並べたる画を次第次第不見かして何き

もがゆどつとの作ハ格別見事ありんと初より心の中不待
 ちまふけ居たりし小豈圖らんや画の面煙の如く村雲の如
 くして生たる筆意としてハ少しも見へざりけしハ諸先生も
 紫亦相違しニハ同人の作ハ非らざらべしとて唯驚くを
 くりたりがゆどつとも此様を見て齒をかみ腕をふぎうて
 憤ふきとも更ふせん方もけを唯惡むべきハ彼の亦るね
 ろなり志きゆたりと獨り座鋪の隅ふて他人の心配も
 を見て心小悦ひ居たりしを不敵おもはれ小引替へるまん
 ぢハ本人よりも却て心をいたしめ大音揚てニハ人の所
 為ありニハ人の惡計あり諸先生もよく見給へまの画ハが

心どつとの作ハけを余ハ同人の画のふくを成ましむれ
 一見したるしハ其見事ありしこと譬へんかまあり今この
 画亦て其周圍の筆意を見て斯く煥付かざりし以前の巧
 拙を判断し給ふべしと唯獨りて類ハ其言譯を為せり
 見物の人々も皆ろをんを大量ある感と且ハがゆどつ
 との不幸と氣の毒ハ思へども當日の規則にて何分おも
 斯くきたあき作ハ褒美を與ふること出米兼尚其外の画
 を見分せし小衆評不由まろをんぞの作を第一と定めてこ
 と小當日の褒美を與へたり然るもろをんをハ一旦この褒
 美の品を受取り直ふこまはがゆどつとへ授けて云くまの

品ハ余ガ取カベキものハ何カを君一君の画ハ賤シキ舉動
を爲セし者も亦バこの褒美ハ固より君ガ手小落ること
疑も何カを假令ハ然るときも君ハ勇一少して余ハ直小
君の次ふもバ余ガ身小於て何の面目カニ小君クンこの
後余も虫精して君と等々同ふもカの望あき小何カとせんと
も唯公け小藝を覽ふべきのそかりをり小も鄙劣ふる舉動
小陷ることあり小人是余ガ心の中の實ありと
監定の諸先生もろき人を仕打を見てこもを譽めざる者
も何ハ何カを違小一同相談の上小てこの度限で同様の褒
美を二通り差出さ小こと小決定して其一ハが以とつとケ画

の巧みカガたれ小こも依典へ其一ハろき人をケ徳義の美
ずんがたれ小あれと興ふべしとて當日の事と終りて

（ほ）瘦犬の煩生しき事

ふらんしきものハ何カ子供その先生小伴ハ或村を通行せし
折しも二玉足の瘦犬恐ろしき氣色小てこも小吠掛り或ハ
咬付かんぞ一或ハ飛付かんぞして其煩生しき小場へを
らんしきハ杖を振廻し或ハ石を拾ふてこもを追へバ直小
逃去まとも振返りて二三間も歩めバ又後より附來てこも
と如何ともまてかたを兎角も問小或ハ百姓家の畑の畝
を來て彼小瘦犬も去りたり然る小ここの畑の傍小肥え

大りたる一疋の飼犬ゆゑにけりわたりて眠り居たを以て
 らんしをハ復と犬小恐色先生の側小なり付て其處を通り
 過ぎ一犬ハゆりくとして此方を見向きもせざりけり
 兩人ハ又進で鳥獸を飼ふ原小至まらば一群の鳥獸人
 見て鳴き騒ぎ何れも長き頸を揚て兩人の方へ向ひ来る其
 有様かりくもけり又馬鹿らしくも見へけり
 にも笑ひあきら杖をもて一寸其頸を打ち其より通り過ぎ
 て少しく先きの方へ至るはこゝハ數疋の牝牛一疋の牡
 牛小伴あて群を居たりあふんしをハ又少しく恐る様子
 ありしども牛ハ平氣ふて草を喰ひ其頸をも揚げたりり

り
 先づ三の處も無事を通り過てあふんしをハ先生小向ひ彼
 の飼犬も牡牛もかたふりくして鴛鳥瘦犬の如くふり
 牛ハ實小仕合なりしをさるるを同ト畜類ふて斯く相違
 何れハ何故なるやと尋ねけり先生云く都て弱く戦
 き畜類ハ自分の身小頼むべき力もあらず勇氣もあらず
 終他の者しし害を加へるを恐るるは然恐色我し先小他を
 犯して身の災難を遁えんと思ひ動物は色ハ何物小向ひ
 駭がしく敵對するにたふさず其實ハ憶病ししと相手の
 力の差を恐るるありしを小別替へ自分の身を護るだけの力

を備ふか畜類に己が身を頼みして他のものを疑てさか
思いつり平氣にして身かの位を失まざる有りこい唯畜類
のこあふを人も亦然り騎く賤しき人物は常小他人を猜ひ
其顔色いつも不平あり自分より立上り者何はこき候恐
きて妄小言を憶病の餘り小ハ相手の人へ失禮をも加へて
只管身構をせんとまかものあり唯大量の君子ハ然らざる
の心常小静小して人を犯さず人を害まらることふく人小害
せらるゝふとなく或ハ僅小害を被ること何れもこき以捨
て、問も其故ハ假令ハ害を被りて違小彼是よりしてあき
を取れざるも亦自分の身小頼むべき力量何れも由り

何時ふても然る人と思ふより小事の茶理を取れさんと
をり覺悟何れにあり

○いあふの奉行の事

兩國戦争不及ふより互小力を盡して双方の害を為し或
ハ軍勢を出しを敵の國を荒らし人を殺し物を奪ひ取ら
軍艦を出しを敵の船を打碎く事と乱妨狼藉至らざる所
ハ斯く双方の人氣荒立も悪事を犯す其中ハ敵小弱して正
しく事を行はざる小深物を飽さん事と者ハ實小大害を
る人物とあふべきあり

項ハ紀元千七百四十六年英吉利と西班牙との間ハ戦争を

此五軍艦を出して叔方の船を打擲せしむる折りも
 是れ此の商賣船をせさくもといつゝ船多く荷物を積んで
 西印度の志やういふとまゆまとの間を通りて船の底を
 損じて水船と爲りしむる由り乗組の者ハ唯その命を救
 んだためきゆをの港もわかへ乗込もたうこの處ハ即ち西
 班牙の領分とすハ乗組一同の者も身ハ倅とあり船も分捕
 つかふることあふんと固より覺悟を極め船將先づ上陸して
 港の奉行と面會し船ハ固より引渡さるべきとも乗組の人
 數ハ計ハ假令以侍りふるもその取扱を寛く爲し給ふる
 一と請ひしをハ案ハ相違し奉行の船を受取らざりて

かく若の船若し戦争のためかこの港へ入るにせしむるに
 此を今捕らるべきハ當然も是れ唯是商賣船の難船にた
 るもの小し君等ハ漂流人ト等しき難船なる身あり余々心
 小於てハ當小に是を害せざりとのまふを又此も此助けさ
 る可らむ故に乗組の人ハ安んじてこの港に止て今日より
 船の修費を取扱ひ或ハ修費のへ用を拂ふがたなりハ荷物を
 賣らも勝手なうらく修費出来の上ハ何時までも自由に出
 帆せしむること我西班牙の船小異ふことありしと
 右の次第にて船の修費も出来て出帆しんとすハ是れ奉行
 ハ尚も心とす人々印鑑を作り進海して西班牙の軍艦小行

逢ふことなるもあつたの船小害を加ふ可らむとの旨を記し
の印鑑を渡して船を送出せり
右の如く忠臣も大に思ひぬ不幸の中不幸を得て難ふく
ろんどんへ歸して一全くすわかの奉行の大量小由て出来
しことあり

第二十八章 武勇の事

危き候恐もをりてこそ小向ふ者と武勇の人と云ふ事の趣
意宜しき小叶へは勇氣を振ふて危き小向ふを良しと警へ
ハ同類の人の災難を救ふて其死を免りてしや或は強盗を
防て自分の命と物とを護り或は敵の軍勢と進陣ふを我本

國を守らば如きは例も趣意の宜しきものありて云ふべき為
小の勇氣を振ひ危き候犯しを憚ること力死を良しとる者
是も是とも事の趣意宜し物多きなるは假令は勇氣を振
ふりては候警も不足りを警へハ物を奪はんがため小働く
強盗は憚りて勇氣の多々人徒小他國と害せんがため小
攻入小將の軍勢も強強くして勇氣の多々人とも敵は此ハ
唯此の働の猛きものをふてこそ武勇と云ふ可らむ古より
武勇の大將も名高き人ありては其實ハ武勇ありざる者
多し假令は軍本の勝つと雖ともその軍の趣意宜しかり
まハ真の武將と云ふ可らざるなり

① 八島を度る事

千八百三十八年の九月、（一） 船もあつても、（二） 蒸氣船英
 吉州のつれを、（三） 船もあつても、（四） 蒸氣船英
 波風小港へ、（五） 船もあつても、（六） 蒸氣船英
 付けり、（七） 船もあつても、（八） 蒸氣船英
 小住居も、（九） 船もあつても、（十） 蒸氣船英

の方を、（一） 船もあつても、（二） 蒸氣船英
 沈む、（三） 船もあつても、（四） 蒸氣船英
 思立、（五） 船もあつても、（六） 蒸氣船英
 叶も、（七） 船もあつても、（八） 蒸氣船英
 小舟、（九） 船もあつても、（十） 蒸氣船英
 共、（十一） 船もあつても、（十二） 蒸氣船英
 處、（十三） 船もあつても、（十四） 蒸氣船英
 命、（十五） 船もあつても、（十六） 蒸氣船英
 右、（十七） 船もあつても、（十八） 蒸氣船英

武勇ふくせ世ハ九人の者も空しく海に沈もし等あるハ
疑ふべき小つらも唯一筋ある真心ふて人の死をもを憐
れ視き小恩びせ身を殺しても同類の人を救うんことをの
働ふ由て功德を成したるあり

こきふてて娘の評判天下小響き渡り世の人口を聞け
みきを譽めざる者あり画工寫真師ハ其をさく燈明堂の家小
乘りて娘の寫真を取り似顔に画き或ハ其難船を救ひしと
きの有様を画小寫真を者あり國中盤々の人ハ手紙を認めて
この娘小贈り其手柄を譽る者も有り或ハ諸人相談の上六
百不んと余の金を出合せてこき小贈りし者も有り其面目

盛ありといふべしやもくありこの娘を為せし不との事
小つらもさちり一度世小功を立てし者ハ數千歳の今日小至
るまでも世上小其名を忘るることふしきとハ今この娘の
武勇も其芳しき名を數千歳の後小流して朽ることふりや

斯く勇しき娘あきども自か多謙退もる徳義も亦人小優を
たるとは神妙あき世間小自分の評判高きを聞き却て驚
云く余ハ唯當然の事を爲したるのみ非常の働ける小非と

④ 瓦師の子たむの事

英吉利の國うんちねをとるのぞくとる名いけん親しく自

かの見一車ありきて左の話を記せり

この里小一人の職人あり焼瓦を積立ちて以て家業とふし
随分よれ職人ふきども酒を好み毎日糶きたる錢ハ皆こを
と酒屋小費して一文でも残さむ妻子ハ唯銘々の働ふて喰
ふまゝ小捨置き以きりりもこをを顧みるこことふし誠小言
語小絶えたる次第ふきども如何ふせん職人ふと小ハ珍ら
しくとぬことナク

右の次第ふてこの職人の妻子も飢寒の難渋小陥り大き場
合ありしが唯長子のたむを頼小して一家内の患を免くま
たりをもくこのたむある者ハ知少のどれより父の手小就

て死の職の手傳子使も早く其仕事を覺へて十三四歳の
と彼小ハ相應ふりた貨錢を取るをどかありけしハ已ガ取
るし錢とハ成犬け父小渡さぬやう小して自分の手小握と
ハ些細のこしと錢でも盡く母小與へて家内の費小用ち
やう小せり或ハ彼の畜生小等しき父ガ酒小酔て家小歸り
太平樂と唱へて人を罵り母も子供もこを小打まんこも錢
恐むて其間小寄付き得ざり又彼小もたむもりハ迫り其
左右小寄りせひ言葉と和らげ顔色と尋ら小しと尋々小
慰め達小床小引へきて懇ろ小休息せしむるふと唯獨り小
て心配もかゆ者母もこを悦び陰小も日向小もたむハこ

の家いへの心こころ棒ぼうありて、こも候まは愛あいもろら其その道理道理あり
 或ある日ひたむハ仕事しごと不行いきあつくひと頭あたま不の載のせて高たかき挿さ子こと
 上あるまに足あしをふもつして下した不あ積たきたる古ふる瓦わの上うへに落おち
 腰こし骨ほねをえくくか不あ打ちて惣さう身しん血ち不あ凍こと氣き絶ぜつしけきハ其その場ば不
 在あ合あふ人ひと々々も驚おどろき走は集あまて先まづ面おもてに水みづを吹ふ拭ぬふどし々し介
 抱かかせし不あ漸しく呼こゝろ吸こを吹ふ返かへして周まわ圍りを見み廻まわりしこゝろもある聲こゑ
 不あて泣なて云いくたより少すこふき母ははの身みハ如何いかなる人ひと々々きやと
 叔おじ怪け戒かい人ひとをハ家いへ不あ連づ歸かへり醫い師しを呼よび療りやう治ちをも打う柄へも母はは
 こも不あ抱かかりぬをうせ不あて泣なつ叫こゝろびつ狂くる氣きの如ごとくあつり
 是こゝろハたむハ苦くる痛うの顔かほ色いろを見みせましを母はは不あ向むかひ痛いたく泣なる

不ああま必かならず全ぜん快くわいして又また働はたらくやう不あふる人ひと々々とて療りやう治ちと終は
 るまでおれの間ま不あ痛いたきとも苦くるしきとも唯ただ一ひと言ごの言葉ことばもあ
 かりしといふ
 たむハ賤せんしき職しやく人ひとの子こ不あて困こより讀よむことも書かくことも
 知しらざる者ものふきとも余あが説せつを以もつて評ひやうをきバふまは武ぶ勇ゆうの
 人ひとと云いふも可べからず

第二十九章 我われ本ほん國こくを重おもんを事こと

我われ身みの生なまて成な長ながせし所ところハ本ほん國こくを重おもんをるハ天てん然ぜんの人ひと情じやう
 あり假かり令しハ其その國こくの民たみハ開ひらけをして曠くわう野やありも假かり令しハ其その國こく
 柄へハ賤せんしきして他た國こくの人ひとの目めを以もつて見みるハつち多おほくはなり

小思ふも、其本國の人を於てハ自かたこきを重んぜ
ざる者ありこれを報國の心といふ報國の心もこき程よ
くして道理の國の内不緊きかくまたハ大小蓋りものか
や報國の心はまハ人皆其國の土地を大切にして假令は主
ふ良地面おもてもこきを粗略小思ふことなりこの心はまハ
外國の敵を防ぐハ勇氣を生し國中一般の爲を思ふて同國
の人々互ハ相親しむの情を生むハ警へハ和蘭の人ハ他
の國よりハ和蘭の國を重んじ他國の人よりハ和蘭の人を
親しむ和蘭を防ぎ侍るためハ命をも抛ち唯一心ハ和
蘭の繁昌を願ひ和蘭人の幸福を祈るハ其政府ハ對して

深切の心を抱くも和蘭國の政府あるが故あり其國の掟を
評議し宗旨の教を進め世間の萬事を取扱ふがためハ行え
る所の政度風俗を良とするも和蘭國の政度風俗あるが
故あり右の次第を以て和蘭の人ハ太平無事の民と爲りて
政府ハ逆ふこともなく人々互ハ力を合せ心を同ふして一
國の繁昌を致さるあり假令他國の政府より和蘭を支配する
ことありハ假令ハ其政度風俗はハかゝるして其本國ハハ
よく相應するも和蘭の人ハ決してこきハ歸服せざるハ
本國を重んずるの心も上ハ記せり如くこきを程よくを
ハ大小蓋りものと雖も若し其度ハ過て道理を領しざるハ

至る多たハこそがため害を生むること甚多し假令ハ我
 本國を重んずるも前後を顧みざれば國の瑕瑾とふるべき
 舉動何れハからん國民の成行ハ害とふるべき罪を犯さず
 かつどこハ報國の心何りて活きも眼ふきものといふべし
 我國を大切と思ふはして妄ハ他の國を賤しむべからず妄
 ハ他國の人を嫌ふべしをこそ一人の身の止小譬へて
 云らんハ恰も我一人を高く構へて他人ハ我小等しき徳義
 なくして我小等しき面目を得べしをさかものと思ふが如
 し固より正しからざる事柄ハて我國を犯す者何れハこれ
 を防禦さるハ論を俟ざることふるべきも格別の趣意も何れ

ざるハ我より先ハ他國を攻んハざりて妄ハ兵を擧さるや
 用心を用中々きあり凡そ世の中ハ戦争何れハさるものハ
 巧むを万々止むを得ざるハ何れハさるものハ必也これを企つべ
 かりし又我國ハ於て産物の道を開き交易商賣の法を盛ん
 して自國の利を謀るハ勿論のことふるべきも産物商賣の事
 不就ま他國を害して我國を利むべきものと思ふるべき
 他國の繁昌ハ我國の利益あり其次弟ハ何れハ國ハても繁
 昌さるべき其國の人ハ富を致して我國の人の賣る物を買ふ
 べき故ハ小諸る所ハ我國も彼國と其繁昌の幸福を共ふべ
 きの理ふるべきハかり

右小論を所を一口小云へば一人の身の上の規則を以て
 一國の上の好むもむべきなり九を人として正しき道あり
 へ背りざるは我身を愛し我利益を求る不於て差支りし
 と雖も獨り我ために謀るのみならず兼て亦同類の人を
 愛し我力小叶ふことあるは他人のためをも謀らざらん
 らを國も亦斯の如し九を一國たる者の正しき道あり背
 りざるは自國を愛し自國の利益を求る不於て差支あり
 雖も唯獨り自國のためを謀るのみならず兼て亦他國を
 親しむ力を盡して他國のためを謀りわづらひも其不幸
 と祈るなりわづらひを斯の如く相互ふ其よしを祈るは双方

のため利益あり世間の人々皆幸福を得てありるよく世
 を渡るなりは我身も亦其ありるなり人の間小交して共小
 其幸福を與ふなり他の國々皆繁昌して太平無事を樂む
 なりは我國も亦繁昌して共小太平無事を樂むなりは

① ぎりひきの將軍船を焼かんとせし事

往古きひきの内の何せん國の將軍でともとくるをハ武
 將たきとも正しき人物なりを安小自國のためを思
 過せし余も小理非を顧みし其鄰國ありしれども人を滅さ
 んと欲して頗る小工夫を運らし或日國民寄合の席あり今

當國の威勢を盛たかむらせしてももんを押倒たすき一の策略
必ずも其策略極て秘密あるはこの席あて口外も人から
と仰ぐは列坐の面々ふて一人の人物を撰て余が相談相手
ふ命と給ても人々の人若し余が策略を良とせば則ちも
の通りふ取計は後の日ふ至り諸君ふ於て異論巧くくから
と云ひけもは列坐の人ハさもバマて兼て諸人の信仰せ
る所の何りをたいとをる者を撰て相談相手の役を命じ
たりてもをそくるをハ何りをたいとを近く招きらるは
秘密を告て云ふやうハ今近處の港に碇船せるらせてもん
の軍艦並ふきりいき諸國の船を不意ふ襲ふて残らを焼拂す

いふは此國の勢ならずち盛ふありてきまいきの諸國を押
領も大きあらと必定ありと何りけもバ何りをたいとを可
善の返答もせをして彼の寄合の席に歸り國民ふ告て云く
この國の利益を思へば將軍の策略ふ若くものあらと雖と
も亦この策略を正しからさるものハありると云ひ
けもは列坐の人々も其事の次第を問て答へて即席に評議
を交し將軍の説を拒もたりと云ふ
歴史家のろも人々あらを評して云く凡そ歴史の中に斯く
までも驚くべく又譽むべきこの何れを彼のきりいきの
評議ふて何りをたいとを何れを聞き義を先ふりて利を後

ふまへし七次したる者ハ學者ハハハトモして尋常の國民
あり文字を知る者多ク義理を辨別もぐさも當然の
ことなきとも無學文盲の上民ハ固より其本國を重んじ
只管國のためとの思込し者共ふる小唯一言の言葉を聞
き義理不背くためならず本國の利を棄たるハ實ハこも
を神妙と云ふべきあり

○かきいの義士の事

紀元千三百年の時代英吉利王第三世とわると佛蘭西ハ
政入りかきいの城を圍むこと一年余ふして克たむこを
ためハ英吉利の兵士を失ふことも夥多しけさハ英吉利王

の怒るにと一方ふて兎角を聞ハ城中ハ兵糧つきせ
んかたなく降参の儀を申入せしハ英吉利王ハ容易ハこ
きを聞入せむし云くはよく以て余ハ是圖のよりハ使ひ
ふハ降参が許さへけさど若しさもふくハ城内の人を盡
く殺し其物を盡くハ捕まへしとけさハ旗本ハ列を大
將分の人もこきを聞きハ何より慈悲なき仕方ありやを
據るハりやめしハ自王ハ又勸辨してまうハ一段の用捨を
以て左の如く申渡すべしとの命あり即ち其箇茶ハ城内類
分の者ハ人足ハ徒跣ハ頭ハ冠りものを着け補絆一
枚ハて首ハ繩を附け城門の鍵を以て王の前ハ出づべし然

扱六人の義士ハ襦袢一枚徒跣はだかにて冠りものともかぶらむ
首くび小繩こなはを附けて英吉利王の前まへ引出ひきださき一命いちのみことを差出さしだして
城内ちやうじんの者の赦免しやくめんを願ねがひまきバ王ハこれを見みるより眼まなこと怒いか
らし聲こゑをりたなき汝等なんぢらが強情がうじやう小籠城ころうじやうせしうたれ小我軍勢こわがぐんせい
の損亡そんじやう一方いっぽうあり重々ちゆうぢゆうの罪つとめあるをくかたをりて左右さうぶの者もの
を呼よびこの場ばおて彼等かれらの首くびをもねらむと申渡まことせしうバ旗本はたもと
の面々めんめんあるわるとるやうおと始はじめしして貴族きぞくの人々ひとら皇太子みかど丁てい
でも皆彼みなかれの義士ぎしを憐あはれ何卒命なにぞはなつちのみことをりてハ赦ゆるし給たまはる人々と
諫いさむまきども更さらお聞き入いるべき様さまもりたむ

此時英吉利王の皇妃陣中の見舞として本國より来りて上

の側わき小在こぞりてこの皇妃ハ國王出陣くわうくわうしゅつじんの留主るしゅしゅ中ちゆう不國ふこくの内乱ないらんを平な
け蘇格蘭そくわらんの君きみをも生捕いけぢうおせし乍はどの武功ぶくわうもりり且かつこのと
まふ若君わかにきみでも生なまきたきバ王わうの最も親おやしと愛あいまむ斯このの者ものふ
ていが最前さいぜんりり王わうの怒いかきる有様うさまを見て越こも自分おのれおりたさ
きバ彼かれの助命すけいのちハ叶かなふとぞと思おもひ乃なほち王わうの前まへ伏ふしくこま
お寄よりておがり涙なみだを流ながしてこの度たび道みちを海うみを越こへ危あやきを犯かし
てこの陣じん中ちゆう小来こぞりし唯ただ君きみを思おもひて君きみお仕つかへ奉ほうらんた
めありさきバ今いまの患うれを願ねがふも亦また無理むりおハりたさむ人々
何卒なにぞは天てんと敬うやまつひ祭まつりを愛あいして彼かれの六人むにんの者ものを赦ゆるし給たまはるを
と云いひけきバ王わうも暫しばしば時とき思案しあんの体ていありし黙もく止とし兼かみたうと

見へ皇妃小向て云く余實ハ今日君がうく不在らざるを願ふ有りききとも令君の願を以てはこも成開りさ代を得るこの囚人の君小任る者おれば勝手お取計ひ給ふべし皇妃ハ助命の患を願取りて世の悦みめちるを取敢を祈らし衣服を調へて六人の者の支度を改めさせ英吉利の陣野を送り出して城内へ送りたるを

皇朝書紀 卷の五 皇朝書紀 卷の五

